第３章　アプローチカリキュラムについて

１　アプローチカリキュラムとは

就学前の幼児がスムーズに小学校生活や学習に適応できるようにするとともに、幼児期の学びを小学校教育につなげるために作成する５歳児後半のカリキュラムのことです。本市では、実施期間を５歳児の１月～３月としています。

なお、小学校のカリキュラムの先取りをするものではなく、就学前までの幼児期にふさわしいものにすることが大切です。

また、アプローチカリキュラムの実施期間を、５歳児の１月～３月としたのは、幼児の発達として、特に「人間関係が深まり、学び合いが可能となる時期」であり、具体的には、「友達とともに探究する、興味、関心が深まる、自分に気付く、小学校への期待が膨らむ」などの姿が見られるような時期であるためです。

２　アプローチカリキュラムのねらい

（１）教科などの学習を中心とした小学校生活への見通しをもち、子どもの「育ち」と「学び」をつなぎます。

（２）遊びを通して、学ぶ意欲や学習態度の基礎となる好奇心、探究心を培っていきます。

３　アプローチカリキュラム編成の手順

教育及び保育目標である５領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）は維持しながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（P5～P６参照）の１０の視点を盛り込み、就学前に取り組みたい活動や必要な環境を工夫していきます。

（１）各保育所、幼稚園、認定こども園で作成されている指導計画の形式をそのまま使用されても構いません。

（２）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の内容は、特に新しいことではなく、これまでの５領域に含まれる内容です。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に①～⑩までの番号を付けることで、１月～３月までの間で、１０の姿がどの程度、指導計画の中に取り入れられたかを把握することができます。

※P２０にアプローチカリキュラムの例を掲載していますので、参考にしてください。

４　アプローチカリキュラム作成上のポイント（配慮と工夫）

幼児期の教育においては、小学校の学びの基盤となる経験を、幼児の実態に合わせて経験させることが、小学校への円滑な接続につながります。各保育所等において、アプローチカリキュラムを編成・作成する際にポイントとなる点を、以下のとおり示しました。

（１）１日の時間の工夫

① 活動への見通しをもつ

登降園時の活動や当番活動、昼食時の準備、片付けなど、１日の生活の流れが分かり、一つ一つの活動に見通しと期待をもって取り組めるようにします。

また、活動の切り替わりとともに、気持ちも切り替えられるよう支援します。

② 時間を意識した生活をする

カレンダーや模型の時計を活用し、月、日、曜日、時間の流れ、数字や文字に対する興味・関心を高めます。

（２）活動の工夫

① 戸外で体を動かす

運動会などをきっかけに、外で体を動かす気持ちのよさや楽しさ、心地よさを味わうことができるようにします。併せて、大勢の友達と約束やきまりのある遊びを行い、その楽しさを経験できるようにします。

② 友達と一緒に遊ぶ

就学時健康診断を境に小学校就学に向け、自分の思っていることを相手に伝えたり、相手の思っていることに気付いたりしながら、何事にも意欲的に取り組むようになります。そのような経験を通して、自己を発揮する姿や自己抑制する姿を支援します。

また、友達と目的を共有し役割を分担して一緒に遊ぶことを通して、充実感や達成感を味わい、意欲的に生活できるようにします。

③ 自然の中で心を動かす出来事にふれる

季節ごとの自然の素材やその性質、自然現象、物の仕組みなどを遊びに生かすことができるようにします。

④ 興味・関心をもったものに取り組む

友達と一緒に遊ぶ中で、考えたり試したり工夫したりする経験が十分できるようにします。

⑤ 自分の思いを表現する

友達と互いに表現し合いながら、歌や動き、描画、言葉などさまざまな表現をすることのおもしろさを感じることができるようにします。

⑥ 協同して遊ぶ

５歳児の１月～３月頃には、小学校での生活に配慮して、クラスの友達やグループの友達と同じ目的や挑戦的な課題に向かい工夫したり、協力したりする活動を意図的に取り入れるようにします。

（３）人間関係についての配慮

① 友達と共に生活する充実感を味わわせる

親しい友達と考えを出し合いながら遊びを進め、一緒に心を通わせたり、やり遂げたりする経験を積み、人間関係を深められるようにします。

さらに、友達と共に生活する中で、互いのよさを分かり合い、信頼関係を十分築けるようにします。

② 保育所、幼稚園、認定こども園と小学校との交流

就学時健康診断でかかわる高学年の児童や、生活科・総合的な学習の時間で、低学年・

中学年の児童と積極的に交流を図り、自分の成長に見通しと期待をもち、小学生に対するあこがれの気持ちが高まるようにします。

③ 地域との交流

行事などを通して、年少児や地域の人々とかかわる機会を設け、いろいろな人に親しみをもてるようにします。

（４）家庭や小学校との連携

① 自分のことは自分でする

小学校から配付される「もうすぐ１年生」などの資料を活用しながら、家庭と連携を図り、子どもの育ちについての課題や今後の見通し、そのために必要な取組を共有します。

また、就学前には、基本的な生活習慣を身に付け、自分のことは自分でできるように、家庭との連携をさらに密にし、子どもの育ちを確かめます。

② 生活に必要な活動を自分でする。

家庭と連携を図り、「家の仕事を任せる」など自己肯定感を味わわせる経験を積み重ねます。

③ 保護者や小学校との連携

保護者会や個人面談などで、保護者に小学校までの生活の見通しを伝えます。保護者の不安に対しては、小学校と連絡を取り合って対応できるように園の体制を整えます。

（５）きまりへの適応と安全への配慮

① 規範意識を高める

友達と生活する中で、共同で使うものを大切にすることや、順番を守るなど、きまりを守ると友達と楽しく過ごせる体験を積み重ね、きまりやルールの必要性や大切さなどを感じて身に付けられるようにします。

② 安全に気を付けて行動する

遠足などで公共の施設を積極的に利用したり、交通のルールを守って歩いたりすることで、公共の場での行動の仕方を知らせます。

（６）小学校生活に向けての配慮

① 小学校の施設に慣れる

園外保育の際、連携先の小学校にトイレ休憩で立ち寄ったり、交流の際、積極的に小学校に出かけたりするなど、主体的に小学校に関わるようにします。

また、学校見学や学校体験を通して、小学校の施設や生活の様子を知り、入学への期待と自覚をもてるようにします。

② 保幼小情報交換会を行う

幼児期における指導の経過をまとめ、小学校へ確実に引き継ぎます。相互に授業を参観し合ったり、合同で交流活動や合同研修を行ったりして、相互の教育・保育で大事にしている目標や指導方法等について話し合います。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点を共有しながら進めるようにします。

５　アプローチカリキュラム実施上の留意点

（１）校長、園長、連携担当者同士など、教職員間の交流から始めます。
（２）年間行事計画の交換（学校だより、園だより等）を通して交流計画を立てます。
（３）授業や園生活など、互いの取組を参観することで、共通理解を図ります。小学校においては、子ども同士の交流を生活科の中に位置付けて実施することもできます。
（４）入学前の連絡協議会等で、子どもがどんな点に不安や戸惑いを感じるのかを把握します。
（５）保育所、幼稚園、認定こども園がそれぞれ作成するカリキュラムに若干の違いがあるかもしれませんが、作成を通して話合いの場をもちながら進めていきます。
（６）連携・交流の実践に当たり、作成資料や当日撮影した写真などは、園や学校で保管し、次年度に活用できるようにします。
（７）PDCA のマネジメントサイクルに基づき、教育や保育の質の向上につなげます。
（８）保護者に対しては、園での成長の様子を具体的に伝え、親子ともに小学校入学に期待がもてるように支援します。

6　アプローチカリキュラムの例

	1月	2月	3月
子どもの姿	◆正月を家族で過ごし、楽しかった思い出を保育者や友達に互いに話し、共通の話題で楽しむ姿が見られる。	◆友達と一緒に必要なきまりを自分たちでつくり、友達同士で教え合うなどしてそのきまりを守って遊ぶようになる。	◆クラスみんなで一緒に活動し、力を合わせてやり遂げる喜びを味わえるような生活の中で、クラス全体としての意識が高まる。
ねらい	◆同じ目的をもって活動を主体的に進めていく。 ◆仲間と協力しながら活動を進め自分たちでやり遂げた達成の喜びを味わう。 ◆身近な事象を見たり、考えたりして遊びに取り入れる中、文字などに対する感覚を豊かにする。	◆見通しをもって生活や遊びを進めていく充実感を味わう。 ◆自分なりの目標をもって取り組みながら、共通の目的に向かって友達と話し合ったり工夫したりして、遊ぶことの楽しさを味わう。 ◆互いの思いや考えを伝え合い、仲間としての信頼感を高める。	◆小学校入学を喜び、自分の成長に自信と自覚をもつとともに、身近な人々への感謝の気持ちをもつ。 ◆自分の身のまわりのことが自分でできるようになり、生活習慣が確立する。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（１０の姿）	◆戸外で十分身体を動かし、動かすことによって身体が温まることを体験する。（①） ◆友達と積極的に運動に取り組み、競い合う楽しさやルールをつくって遊ぶ楽しさを味わう。（②） ◆自分達で考えたルールを守り、お友達と遊ぶ。（④） ◆自然現象や身近な環境に自らかかわり、発見したり楽しんだり、考えたり試したり遊ぶ。（⑥・⑦） ◆冬の霜柱など、冬の自然現象に興味・関心をもち、友達と様々なことを試したり、気付いたことを伝え合ったりする。トランプ、かるたなど身近な数量や文字に興味、関心をもち遊びの中に取り入れる。（①） ◆困った時は、自分から先生や友達に話したり、お願いしたいことを依頼したりして解決しようとする。（⑨） ◆正月遊びや印象に残った楽しかったことを絵で表現する。（⑩）	◆手洗い・うがいなど、風邪の予防のための習慣が身に付いてきている。（①） ◆時計を見て時間を意識しながら、見通しをもって場や状況に合った行動をする。（①・②） ◆友達のよさや得意な面に気付き、お互いを認め合いながら、遊ぼうとする。（③） ◆話をしてる人に気持ちを向けて、関心をもって最後まで聞く。（④） ◆小学校との交流体験を通じて、入学の期待をもつ。（⑤） ◆冬の身近な事象に関心をもち、それを取り入れて遊んだり、動植物の様子から春の訪れに気付いたりする。（⑦） ◆様々な物を比べたり、並べたりしながら、大小、軽量、長短など特徴に気付いたり、形の違いを意識しながら構成したりする。（⑧） ◆友達との関わりの中で、言ってはいけないことやしてはいけないことに気付き、相手のよさを確かめる。（⑨） ◆友達と一緒に共通の目的をもち、遊びの場を作ったり、必要な物を工夫して作ったりする。（⑩） ◆自分達で材料を準備したり、工夫したりして取り組んだりする姿を十分認め、自由な発想でのびやかに取り組むことを楽しめるようにする。（⑩）	◆健康な生活に興味をもち、生活に必要な習慣やリズムを身に付ける。（ハンカチの使用、午睡なしでの生活への切り替え）（①） ◆行事や経験を通して、伝統的な文化や食に関心をもつ。（②） ◆冬から春にかけての自然や生き物の変化に気付く。（⑦） ◆園生活のきまりを守り自分で状況に応じて行動しようとする。（④） ◆修了時に向け、自分のすべきことが分かり、意欲をもって練習などにも取り組めるようにする。（④） ◆考えたことや感じたことをいろいろな方法で表現する。（⑥） ◆日常生活に必要な文字や数字、標識などに興味・関心をもち、遊びの中に進んで使おうとする。（⑧） ◆友達と共有した目的を実現するために、言葉で伝える。（⑨） ◆大勢の人と目的を共有し、保育者や友達と相談しながらも見通しをもって進める。（⑨）
小学校に向けての配慮や工夫	◆毎日の生活の中に、小学校入学前に育てておきたいこととして、基本的な生活習慣のあいさつ、着替え、トイレ、ハンカチ持参など、これまでの園での生活習慣と小学校の生活との違いも知るようにする。	◆「あと何分で〇時になるよ」と、事前に声をかけることで、遊びや片付けの見通しをもち、主体的に行動する姿につなげていく。 ◆文字や絵で示した「持ち物カード」を用意する。	◆言葉を通じて意思表示をしていく体験や相手の話を聞いて分かり合っていく体験を積み重ねていく。
気になる子への対応	（略）※個別の配慮を記入	（略）※個別の配慮を記入	（略）※個別の配慮を記入
小学校との連携	◆アプローチカリキュラムの実施に伴い、必要に応じて小学校と情報交換をする。	◆小学校との交流会の計画を綿密に行い、子どもが不安なく交流会に参加して楽しむことにより、小学校入学への期待を高められるようにする。	◆幼児期における指導経過を指導要録にまとめ、小学校に引継ぐ。小学校と共有し、子どもの育ちを確かめる。
家庭との連携	◆休み中の様子を聞いたり、園での様子を伝えたりしながら家庭との連携を深める。	◆就学に向けて不安を抱いている子どもや保護者に対しては、不安に思っている点を丁寧に聞き取り、不安な思いを寄り添いながら具体的な助言を行っていく。	◆子どもの育ちや就学に向けて心配な点など、保護者一人ひとりの気持ちにも寄り添うように心がける。
評価反省の視点	◆休み明けも体調を崩すことなく、登園できたか、また、心身共に安定して過ごすことができたか。 ◆友達との意見の違いや、どうすれば楽しく過ごすことができるかを自分たちなりに考えたり、折り合いをつけ解決したりしようとする姿が見られるようになってきたか。	◆一人ひとりが、生活の仕方や基本的な生活習慣の意味が分かり見通しをもって行動することができる。 ◆自分なりの目標に向かって取り組むことができていたか、また、保育者は、互いに励まし合いながらがんばろうとする意欲につなげていくような関わりができたか。	◆子どもたちのこれまでの園生活を振り返り、成長を喜び、就学への自信につながるような関わりができたか。 ◆一人ひとりの気づきや感動を受け止め、共感することができたか。 ◆友達と目標に向かって力を合わせて活動に取り組めるよう、援助することができたか。

※「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」欄の文末の（　　）内の数字は、以下の１０項目の番号を表しています・

（①健康な心と体　②自立心　③協同性　④道徳性・規範意識の芽生え　⑤社会生活との関わり　⑥思考力の芽生え　⑦自然との関わり・生命尊重　⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚　⑨言葉による伝え合い　⑩豊かな感性と表現）

７　アプローチカリキュラムのマネジメント（ＰＤＣＡ）

計画　Plan【１０月～１２月】

１　園内組織を立ち上げます。
（園長・全職員が参加します）
２　指導計画を立てる際に、教育目標・ねらいや内容を具体的に書き、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識しながら実践計画に活かされるようにします。
３　就学時健康診断で、気になる園児を伝達しておきます。

実施　Do　【１月～３月】

１　５歳児後半の姿が、基本的な生活習慣やルール、環境の構成など見通しをもった学びになるようにします。
２　学校生活に向け、子どもたちが段差なくスムーズに移行できるような指導を工夫していきます。
３　指導が後戻りにならないように、就学前までにできるようになっていることを小学校に伝え、次のステップに繋げていくようにします。

評価　Check　【３月末～４月】

１　指導計画の中のねらいや幼児期の姿としての１０項目が、子どもの育ちをどう捉えて、どの部分に当てはまるか、子どもの様子を共有しながら意見交換をしていきます。
２　日々の記録、写真や動画などにより、資料教材となることで、幼児の発達の状態が分かり、検証・改善に生かすことができます。
３　指導要録に記載されている子どもの実態を共有しておきます。

改善　Action　【５月～８月】

１　保幼小の教職員がお互いの教育について、改めて共通理解をしながら話を聞いたり説明し合ったりします。
（単元・５領域・環境構成）
２　職員が授業参観をすることで、児童の実態を知ることができ、相互の指導の在り方の違いを具体的に話すことができます。

〔留意点〕
・合同研修を行い、接続に向けて意識を高め、十分な意見交換の時間をもつようにします。